考古学情報の国際発信に関するセミナーへの参加について

石　坂　憲　司　（信州大学附属図書館）

1. はじめに

2017 年 2 月 24 日と 27 日、英国のセインズベリー日本藝術研究所とヨーク大学考古学情報サービスにて、考古学情報の国際発信に関するセミナーが開催された。日本からは、奈良文化財研究所の関係者と私がセミナーに参加した。本稿では、そのことを報告する。

現在、全国遺跡報告総覧 [1)]（以下、「総覧」）と呼称されているが、その前身は、全国遺跡資料リポジトリである。全国遺跡資料リポジトリは、事務局の島根大学を中心に、国立情報学研究所の最先端学術情報基盤(CSI)整備事業の委託を受けて、全国の国立大学図書館（最終年度には 21 大学）が構築・運用してきた。本学も当該事業の途中から参加し、長野県、山梨県、新潟県の３県域を担当した。

本セミナーは、全国遺跡資料リポジトリの中心的な役割を果たしてきた島根大学が、連携大学の代表として参加すべきところだが、日程の都合がつかず、島根大学附属図書館の昌子喜信情報サービスグループリーダーより私に参加の打診があった。熟慮の上、好意を受け、参加することとした。私の担当は、全国遺跡資料リポジトリから「総覧」までの連携大学が果たしてきた活動を報告することであった。

開催場所であるセインズベリー日本藝術研究所は、中世の雰囲気をよく残すノリッチにある。ノリッチまでは日本から飛行機を乗り継いで行く。しかし運悪くイギリスのストーム（嵐）に飛行機の便と直撃してしまい、急きょオランダにて一泊することとなった。翌日朝に飛行機は飛び、セミナー開始時間の直前に何とかノリッチに到着することができた。ただし、空港の混乱によって預け入れ荷物がない状態での惨憺たる状況であった。

セインズベリー日本藝術研究所訪問直前には、通訳のデッシー（Dessislava Veltcheva）さん（写真中央の女性）を交え、滞在先の The Maids Head Hotel で、関係者による事前打合せを行った（図１）。

図１　事前打合せ風景

図２　セインズベリー日本藝術研究所

2. セインズベリー日本藝術研究所 [2)]

滞在先から程近い、セインズベリー日本藝術研究所（図２）において、奈良文化財研究所との共催によるセミナーが開催された（2017 年２ 月 24 日）。

本セミナーの進行は、当研究所の考古・文化遺産学センター長のサイモン（Simon Kaner）博士が行った。日本側は、日本語で発表を行い、随時デッシーさんが英語に通訳した。

日本側の発表順序は、当初、石坂、国武貞克主任研究員、高田祐一研究員であったが、聞き手がわかりやすい順番（国武、石坂、高田）に変えた。すなわち、日本における発掘調査報告書の意義、発掘調査報告書の電子化と公開の経緯、現状と今後の展開を順を追って発表した。奈良文化財研究所が作成した発表概要は、次のとおりである。

2.1　国武：日本の文化財保護行政と発掘調査報告書

開発事業により破壊される遺跡を発掘調査するため、日本では文化財保護法（1950 年制定）によって保護している。発掘に至るまでおよそ６つのステップがある。①遺跡地図の作成、②遺跡範囲で工事する場合、開発者は都道府県に掘削の届け出をする、③工事によって遺跡が破壊される場合、都道府県は開発者に発掘の指示をする、④地方自治体は発掘調査の権限を有し、考古学専門職員がいる、⑤地方自治体は開発者と契約を結び、発掘調査を行う、⑥発掘調査報告書を刊行する。発掘調査報告書とは、開発工事によって消滅した遺跡の身代わりとして位置づけられるため、紙媒体で確実に保管されなければならない。しかし、紙媒体では内容を検索することができないため、デジタルによる検索システムが必要とされる。

2.2　石坂：全国遺跡資料リポジトリ・プロジェクトの連携大学の経緯について

現在公開している「総覧」は、「全国遺跡資料リポジトリ・プロジェクト」の成果を引き継いだものである。2008 年度から開始した「全国遺跡資料リポジトリ・プロジェクト」とは、遺跡の発掘調査報告書を電子化して Web で公開するプロジェクトであった。プロジェクトは、事務局の島根大学を中心とした複数の国立大学図書館で構成した。大学は、その大学が所在する府県内の自治体の文化財担当者や埋蔵文化財センター等と連携して、発掘調査報告書を収集し、電子化して公開した。しかし、様々な課題があったため、奈良文化財研究所にシステムとデータを集約し、「総覧」を構築した。現在は、奈良文化財研究所と国立大学図書館にて共同で事業推進している。

2.3　高田：全国遺跡報告総覧の今後の可能性

「総覧」は、約 18000 冊の報告書等のデータを保持する。データは PDF 形式で保存しており、全報告書を対象に全文検索することも可能である。メタデータは、WorldCat・CiNiiBooks・国立国会図

書館・Summon・EBSCO と連携している。「総覧」では、英語の考古学用語を日本語の考古学用語に自動変換し、検索することができる。そのために、英日の対訳と類語シソーラスを作成している。日本研究に興味がある海外の利用者に、より手軽に発掘調査報告書を閲覧できる環境を目指している。

セインズベリー日本藝術研究所側からは、日本の発掘調査報告書の利用の他、いくつかのプロジェクト[3]の発表があった。相互の発表後、主に英語圏での日本の考古学情報をどのように取得するかについて、ディスカッションを行った。

本セミナーに参加されていた京都大学の冨井眞先生が、日本のことを海外に知ってもらうには、ランゲージバリアの解消が必要であり、考古学の類義語を提示できることが重要である旨の発言があった。また、WaKoKu 和考古学辞典[4]という、考古学用語の英語（独語）と日本語の辞典が紹介された。セミナーに参加したロンドン大学の学生は、これまでは日本の発掘調査報告書にアクセスすることができなかったが、今後は研究に活用でき、大きな可能性があると指摘した。本セミナーで得た課題を元に、次のヨーク大学でのセミナーの発表に備えた。セインズベリー日本藝術研究所でのプログラム（図３）は、次のとおりである。

開会の辞を述べるはずであったセインズベリー日本藝術研究所統括役所長である水鳥真美氏は、セミナー前日の嵐による交通機関の乱れによって欠席となったことが残念である。

The Digital Repository of Japanese Archaeological Site Reports: background and prospects for collaboration

A workshop to be held at
the Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures,
64 The Close, Norwich, NR1 4DH, UK

Friday 24 February 2017

Objective

This workshop will introduce the Digital Repository of Japanese Archaeological Reports currently being managed by the Nara National Research Institute for Cultural Properties (Nabunken), and explore the potential for enhanced collaboration between the Sainsbury Institute and its network of researchers and students, and Nabunken, building on the foundations laid by the IN-PACE project in 2015-16.

Provisional programme

12:00-13:00: Sandwich lunch at the Sainsbury Institute

13:00-13:15: Welcome remarks (Mami MIZUTORI, Executive Director, Sainsbury Institute)

13:15-13:45: Overview of national site reports and the background of collaborating universities (ISHIZAKA Kenji, Nabunken)

13:45-14:15: Japan's cultural heritage legislation and archaeological excavation reports (KUNITAKE Sadakatsu, Nabunken)

14:15-14:45: Prospects and potential for the national digital repository of archaeological site reports (TAKATA Yuichi, Nabunken)

14:45-15:15: Discussion / tea

15:15: The Japanese archaeological reports held at the Lisa Sainsbury Library and digital projects relating to the Centre for Archaeology and Cultural Heritage (Simon KANER, Sainsbury Institute)

15:45-16:30: Working with online Japanese archaeological materials (Luke EDGINGTON-BROWN, University of East Anglia, Sainsbury Institute and the British Museum; Lauren BELL, Tumi MARKAN JONES and Muyang SHI, Institute of Archaeology, University College London)

16:30-17:00: Discussion and close

(Translation by Dessislava Veltcheva)

図3

3. ヨーク大学考古学情報サービス [5)]

ヨーク大学考古学情報サービスにて、考古学デジタル情報セミナーを共催した（2017 年 2 月 27 日)。（図４）

本セミナーの進行は、考古学情報サービス所長のジュリアン（Julian Richards）教授が行った。冒頭の挨拶は、当時英国に留学していた奈良文化財研究所の金田明大遺跡・調査技術研究室長が行った。

日本側の発表は、冒頭に、セインズベリー日本藝術研究所のセミナーと同様に、国武、石坂、高田の順序で発表した。発表内容は概ね同じだが、高田の時間を多く割き、セインズベリー日本藝術研究所での指摘を踏まえ、次の事項を加えるなど、今後の展開について発表内容を厚くした。

① 「総覧」の全テキストから考古学用語集を元に用語の出現回数をカウントし、TOP40 を表示
② 世界の発掘調査報告書のリポジトリと相互接続し、クロスリサーチを実現
③ 英語辞書の拡充と英語の考古学シソーラスを構築

ヨーク大学側からは、ジュリアン教授の発表（同テーマでの発表内容が公開されている [6)]）の他、アリアドネ [7)]の紹介といくつかのプロジェクトの発表があった。相互の発表後、ディスカッションを行った。

ジュリアン教授は、

> たくさんの人が日本に興味を持っている。「総覧」の仕組みに感激した。日本語もそうだが、英国以外のヨーロッパの多言語を訳す問題もある。一番大切なのは類義語辞典ができていることだ。アリアドネに日本が参加するメリットとして、世界の人に日本の報告書を読んでもらえる機会が増えることだ。

と述べた。そして、ジュリアン教授からは、「総覧」を今後、世界の考古学情報と連携させるよう強く要望された。セミナー後、ジュリアン教授の研究室にてさらなる意見交換を行った。（図５）

図４　ヨーク大学考古学情報サービスとのセミナー終了後の記念撮影

図５　ジュリアン教授の研究室にて意見交換

ヨーク大学考古学情報サービスのプログラム（図６）は、次のとおりである。

ヨーク大学プログラム

日時：2017 年 2 月 27 日
場所：ヨーク大学　キングスマナー
参加者：Julian 先生、Judith 先生、他 3 名
奈文研：国武、高田、小沼、南、金田
信州大学：石坂
通訳：Dessislava Veltcheva

14:30 Opening
-Kaneda Akihiro, Nabunken(Nara National Research Institute for Cultural Properties, Japan).

14:40 Long-term Data Preservation and Re-use: the work of the Archaeology Data Service
-Professor Julian Richards, Director, Archaeology Data Service, University of York, UK

15:00　Discussion

15:10 Internet Archaeology - the first 20 years of publishing on the web
-Judith Winters, Editor, Internet Archaeology.

15:30 Discussion/Break

15:50 Overview of national site reports and the background of collaborating universities
-Ishizaka Kenji, Shinshu University.

16:20 Japan's cultural heritage legislation and archaeological excavation reports - Kunitake Sadakatsu, Nabunken.

16:50 Prospects and potential for the national digital repository of archaeological site reports　-Takata Yuichi, Nabunken.

17:20 Discussion
17:30 Close

図６

4. おわりに

今回のセミナーの成果は、今後さまざまな連携事業へと繋がっていくだろう。

高田研究員を中心とした今回のセミナーは成功裏のうちに終了した。同行メンバーの小沼美結アソシエイトフェローには、さまざまな交渉事（嵐によって不明となった預け荷物の対応、入国審査が厳しい英国入国時の説明等）を、南幸一課長補佐には渡航手続き、写真撮影（本稿掲載写真は、全て南課長補佐の撮影）といった記録等の事務をしていただき、快適な旅程を過ごすことができた。この場を借りて感謝申し上げたい。

信州大学附属図書館としても、今後の「総覧」の発展のために、可能な範囲で協力していきたいと考えている。

注・参考文献

1) 全国遺跡報告総覧
http://sitereports.nabunken.go.jp/ja
2) セインズベリー日本藝術研究所
http://sainsbury-institute.org/ja/
3) Online Resource for Japanese Archaeology and Cultural Heritage (ORJACH)
http://www.orjach.org/
4) WaKoKu 和考古学辞典
https://www.wakoku.eu/
5) ヨーク大学考古学情報サービス
http://archaeologydataservice.ac.uk/
6) Long term data preservation and re-use: the work of the Archaeology Data Service
https://www.youtube.com/watch?v=1-880BL3eQE
7) アリアドネ（ARIADNE）
http://portal.ariadne-infrastructure.eu/